



虚構世界

ミライハキレイニ

皆さんいかがお過ごしでしょうか？

覚えていてもらえればうれしいです、今回は私が出張です。

ジャッジメントで黒い本を述べさせていただいた、黒い翼の男です。別名悪魔とも呼ばれています。

名前は特にはないのです。

自分自身を出すのはあまり好きではないのですが、中々私にはできない体験をしたので、これを書かせていただきますね。

何故私なのか、というのは、中立位置にいるからだということです。

裁判所では色々な人の人生を知ることができるので、あの立場にいることは個人的には大変気に入っています。

ですが、最近変だと思いませんか？

...裁判所に来る人がおかしいとかではなく。

体験談を聞いてもらうのが一番ですね。あの本以外のもので人の人生を見るのは久しぶりです。長くなりますよ、いいですか？

インターネット、携帯電話、厳しくなる法律、おかしい世界。

物凄く世界が早く回っていると思います。

特に...インターネット、電話の登場については面白く見させていただきました。

皆さん周りを見てますか？

ええ、日本では就職できない人が多いとか...、いえ、人間の世界はよく分かってないのですが。そう言うのは別の者たちの方がよく知っているのです。

皆さん周りに人はいますか？

お友達と呼んでいる人の名前と住所、年齢、生年月日、生い立ち。

知っていますか？

お友達と呼んでいる方たちの、本当の性格。

知っていますか？

そのお友達の悩み事。

今回のお題となるのはこれです。

私がよく喋ることの方に驚かないでください、面白いので、少し調べておきました。

はい、これは次にも使用すると思われる裁判の際に、日本に行って調べてきたんです。

なぜ日本？それは、ただ単に私が一度行きたかっただけです。

カタナとかキモノとか、そういうものを一度見てみたいと思ひまして、いった先が、戦国時代でもなく、この時代だったのです。

最初はがっかりしました。

日本をよく知らない人間が、忍者と侍を期待していったのに、普通の服着てビコンクリートジャングルを見てがっかりするのに近いかと。

今時そんな人いないとか言わないでください、現にここにいるので！

最初はがっかりしましたが、すぐに別の好奇心が芽生えました。

私もさすがに芽生えた好奇心には勝てません。

面白かったので、私はここで一カ月の間いることにしました。服装は勿論この時代に合わせましたよ！

服そ上については困ったので、たまに本を代理で読んでもらう、例のあの言葉の悪い彼に見立てていただきました。

元々黒髪なので、その髪をワックスで立てて...、黒いシャツに、ジーンズです。羽も見えなくしてみて。

どうです？

鏡の前で立って見て、カッコイイと自分で思います。細身の私には随分スタイリッシュに見えます。

自分でうっとりしました。

鏡に映ることより、この時代の服が似合うことの方にびっくりです。

私は普段、黒い手袋に青いコート、黒いズボン、ブーツという、いわゆるファンタジックな服装なので。

アレをこの時代ですると、コスプレなるものになるらしいですね。コスチュームプレイ?何ですかね、それは。

私の知っている意味と違うと怒られたので、割合させていただきます。

...失礼しました。はしゃいでしまいました。

しかし家というものがなかったので、しばらくどうするかで悩みました。

隣によくいる彼はこの世界をご存じで。この時代を、正確には。

あちらの白い羽の女性のなかにも一人、この時代が大好きだという方がいましたね。

正行にリージ、彼らの時代です。彼らはインターネット上で別の生活をしていたと聞きました。

確かインターネットという架空空間の上の名前があるのですね、彼らの場合は固定ハンドルネーム。

最初は意味が分かりませんでした。

あれを読み上げるのは大変難しかったです。ハンドルネームにシステム、機械の名前からルールまで、意味が分からなかったです。

が、戻ってきた今なら少しわかります。でも本当に少しです。

なので、それにまつわることはいまだに彼に代理で読んでいただきます。

さて。すむ所がなく一カ月、ネットに興味ありの私なので、ネットカフェでしばらく暮らせとい

われました。

ホテルを手配してくれないのが彼です、たぶんわざとです。

ネットカフェの手配は、ほぼ例の彼がやってくれました。いつの間に証明書なんて作っていたのでしょう、写真に撮られたことすらなかった私には中々斬新な機会でした。

そう言えば服を身立ててもらった際に、妙なものをみせられました。

私の知っているカメラと違ったので、その時はカメラだと思わなかったのですが、今思うとあれがデジタルカメラ、略してデジカメというものだったんですね。

あのあと彼は喜んでどこかに持っていったのですが、彼が人の世界で暮らす場所で、勝手に証明写真として手続きしたそうです。勝手なことをしてくれますね。

私は機械音痴ですか？それとも理解が足りないのでしょうか。

しかしどうやってそれを写真に起こしているのか、私の知るのは、箱に入った、暗い場所で...

その仕組みもよく分かってないのですが、あの時代よりはるかに進化しているようですね。

何にせよ、インターネットの存在を理解してなかった私が、一カ月でその仕組みを知れということの方が無理だと思います。人より頭の回転が速くて長寿でもね。

では前置きはこれくらいにして、いきます。

ネットカフェ、で、何をしろといわれても、何も分からない。キーボードの配置を覚えるのに半日かかりました。

白状します、私は中世なら好きなんです。日本でいう戦国時代の初期あたりです。

しばらくは彼が隣でひたすら教えてくれました。

ドッキリ動画なんかに引っ掛かりましたが、私の立場で驚くわけにはいきません。...正直言うと少し驚きましたけど。

リーグと正行がいたのは、大型掲示板ですね。なるほど、見ていて非常に面白いと思います。

感覚的に言うと、ノートが大きく広げられていて、それに色んなところに住む、顔も性別も知らない人たちがかいている。

それを自動的に反映してくれる...、これがインターネット何ですね。ただの鉄くずにも見えるし、どこか芸術的なフォルムにも見えるこれがそこまでの性能を持ったものだとは。

ただ、場所...板とスレッド?によっては面白かったり、なんだか不穏な空気だったり、見ているうちに疲れてきて、私はすぐに飽きてしまいました。

二時間くらいやって、飽きたと素直に言ったら、頬をつねられてしまいました。痛いですが。本を読む立場なのだから、こういうのを覚えろと怒られてしまいました。

ですが折角来たんですから、好きなものをみたいです。やはり戦国時代の日本の着物、刀を調べるのは大変楽しかったです。

着物と刀にも種類や、時代によって変わるのですね。

インターネットで画像検索、それを見ると沢山の情報が。

情報共有まで出来てしまうんですね、私の読みあげる本と同様に高性能かもしれません。

いえ、私の本の方が未知数ですけど。人の心を映すという点では。

失礼、また子供のようにはしゃいでしまいました。

そのうちに例の彼が、私にSNSというものを教えてくれました。

ソーシャル・ネットワーキング・サービスというものの略だそうですが、説明されても意味が分からないので、まずは触ってみるまでです。

彼は今の世界に詳しいので、こっそり来ては遊んでいたり、時には人に紛れて仕事までしているそうです。

何の仕事か聞いたら、ホストもやっていれば、ある機関の社員として重要位置にいるといました。

詳しくいわれてもよく分からないので、放置します。

彼はああ見えて頭はとていいんですよ。口は悪いですが。

ほら、子供にも優しいでしょう、そこは評価してるんですよ。

私と彼の間柄は、同僚に近いのですが、私の方が少し上と皆にみなされているらしいですね。

何せ本を託されていますし、私の方がやや冷静なので。

今の私は中々に冷静さを欠いています。目の前でこんなものに触れられると置いていなかったのに、無邪気に思い出してしまいます。

そのSNSの名前は...えーと、なんでしたっけ。まあ、おいておきましょう。

とりあえず友達が欲しいと思いました。共感してくれる人ですね。

私には裁判所の彼らや、人のいう地獄と天国を管理してる彼ら彼女がいるので、友達には困っていません。

けど、やはり戦国時代を知りたいので、その友達が、人でほしかったんです。

人がどのような考えを持って生きているかを知りたかったというのもあります。

私は黒髪ですが、顔立ちは白人に近いので、街歩いていると時々面白そうに見られます。

見目がよいといういい方をするとナルシズムまじってしまいますが、事実なので仕方ないです。あ、頬はつねらないでください。痛いです、やめてください。

言い直すと、見立ててくれた彼がセンスがとてよかったです。

なので、チャラチャラとしたものでもなく、かといって堅苦しくない着崩し方や振る舞いを教わりました。

少しか化粧までされました。動物はオスが着飾りますが、人間はメスが聞かざるものだと思っていました。しかし最近はおスもするようです。

つけられた香水やらなにやらが私の肌に悪く作用しなければいいんですが。

私はあの通り、いつもは堅苦しい性格ですから、まさか彼に教えられるとは思いませんでした。

ですがこれが後で役に立ったんです。

オフ会という場所で。

一カ月、彼のネットワークに加わりました。

驚きました、彼のネットワークは今まで見た人間の中でも群を抜いていました。

人間じゃないといったらそれまでですが、さすが裁判所に立っているだけあります、人の心を

つかむ文章、言葉遣いがとてもうまかったのです。

あの裁判所、大量にいる私たちの中から、たった五人ずつ選ばれたのですから、まあ彼が優秀なのは間違いないです。

私はどう接していいかわからず、最初は人間の扱いに困りました。

さて、SNSですが...、登録を四苦八苦して終えた後に確認すると、彼の友達といわれものものなかに、日本の歴史に詳しい人たちが多くことでした。

私は顔写真をはりました。更に生まれをソ連...あ、これは古いんですね、ロシアです。それに設定しておきました。

彼はカリスマ性を持っているので、その彼の紹介で海外、日本に興味あり。そう伝えてもらったところ、軽く数十人と簡単にお友達になることが出来ました。

最初はとても面白かった。

メッセージやツイッター、色んなものを駆使して、気になったものを質問する。

ときにはこちらも質問を受ける。あいさつを繰り返す。

興味深いものです、たった一週間の間、インターネットにずっといる私に、どんどん砕けた話し方になって、生活の一部を直接的ではなく、見ることができる。

確か一昔前はこれがなくて、手紙や電話でのやり取りが主流でしたね。

以前裁判所に来た例でいうと、電話代がかかってしまっていて自殺してしまった子が来たことがあったのですが、今は電話代すら定額だとか。勿論、インターネットも。

あの子もこの時代だったなら生きていられたのでしょうか？まあそんなことはいいです。

携帯電話は、彼が持っていました。触らせてもらいましたが、全く使い方が分かりません。人は器用なんですね。

私の中のひと昔は、千年くらいは軽く前なんですけど、ここでいうひと昔は、十年です。

年月の流れが目まぐるしくて、こちらで主流の英語ですら略されていて、日本語は勿論、英語まで再度覚え直すのに困りました。

顔文字と言い回しまで変わっているだなんて、困ります！顔文字の存在だってこの前やっと知ったばかりなのに！

私の持っている本には、私たちにしか分からない言語で書かれているので、そういう不自由さは味わうことはなかったのです。

一見二十代後半の、黒髪のロシア人...今思うとなんだか設定が変ですね。そこは彼が上手くあとづけをしてくれたので助かりました。

そのロシア人の私は、数日たってオフ会なるものに連れていかれました。

後で彼につねられそうですが、私は異性も同性も気を惹くタイプらしいですね、嬉しいです。昔でしたら異人さんとして忌嫌われていたはずなんですけど、時代が変わったんですね、珍しさに沢山声かけられました。

まずは皆と居酒屋へ。

恥ずかしいですが、私はお酒をたしなんだことがありませんでした。

なので、彼に無理やりビールを飲まされました。喉がひりひりしました。少し飲んだだけで、頭がくらくらしました。

私が知っているのは白酒やワイン程度なので、本当にお酒に無知なのです。

話は大変楽しかった。歴史のゲーム、参考書にあるような歴史の話、家の作りから武士たちの役割。

会ってなおさら盛り上がるお互いの行動について。

...楽しかったのですが、そのあと私は少し孤独を感じました。

彼らの性別から年齢、本名を、会うまで知らなかったのです。

しばらく誰が誰か一致せず、困りました。

なので、冒頭のおかしい世界というのはこれをさすんです。

下手をすると、本名、住む場所の詳細なんて誰も知らない。また、私の住む国や大まかな場所は聞いても、詳しいことまで突っ込んできかない。

正行の裁判の際に彼が行っていたことはこのことだったのですね。

勿論、私は設定づけをされているので、それを言うだけですが、これが彼らの日常なんですね。

その設定づけすら気軽には言うなと彼に強くいわれました。友達なのに？住んでる場所と名前を言ってはならないと。

働いている先の人たちなら別でしょうが、仲間と気軽に呼ぶ彼らは、お互いの年齢も、誕生日も、本名も、住む場所も、家族構成も。

それを飛ばして仲良くなってしまうのですね。

こそりと隣の彼に来ました。これが常ですか、と。

軽く頷いて、彼は説明をしてくれました。

相手は会うまで何も知らない、知る手掛かりは、相手のHP、日記、プロフィール。時々写真が載っていればそれで知る程度だとか。

オンラインで公開している日記になにが書かれていますか？

その日の大雑把な行動、地名をぼかしての場所で、なにを買った。

それでなにを知れといわれたら困るのですが、これも慣れだと彼に言われてしまいました。

慣れ？私には麻痺という言葉が正しいと思いましたが、説教臭くなると怒られたので、あまり言わないでおきます。

あって初めて性別が判明する方も。

相手方も、私が彼とどのような間柄か、どんなことをよく話のかはその時に初めて知る。裁判所の話をしたら、他の彼らは全くわからなかったようで、彼に『うっかり喋るな』と頬をつねられました。痛いです。全力でつねられました。

そしてオフ会を終えて帰り、またネットを見る。

なかには仕事先が見つからない、と愚痴る人。

ネット上では如何にも充実した人生を送っているかに見えた人が、酔っ払って愚痴をこぼしていました。上司や同僚の人あたりが辛い、仕事がつまって寝る暇もない。

鬩りのある顔、どこか生気がない様子は私はすぐに分かります。

案の定です。その人は私がその地を発つ直前に亡くなりました。

なのでこちら...裁判所で会った時、驚かれてしまいました。

来たこと自体はいいのですが、私の持つ黒い本にはその人の悪事が事細かに全て忠実にかかれています。

白い本にはその人の善行が事細かに。

本には、まず私の方には、出身や年齢や育ち、全て書かれてあります。

ですが、本に書かれている内容と、ネットで見たその人の日記やプロフィール、それを照らし合わせて、思わず首をひねりました。

その人は出身地は勿論、育った経緯、学生生活、その後の暮らし何から何まで作り上げていた。インターネットという虚構の世界で。

インターネットでは随分といいランクの学校を出たと。世界的に見て、です。海外の大学を首席で卒業したんだとっていました。

住んでいる場所は東京、働いている場所も大手の会社。

私は、その場は信じてしまいましたが、彼から言わせればすぐに嘘と分かるそうですよ。中々難しいですね。

私は人を信じやすいのでしょうか、たまには疑うことも必要ですね、修行が足りません。何故そうまでして嘘をついたと裁判所で私は聞きました。

友人としてでなく、ただの裁判員の一人として。

その人は泣きながら言いました。

『下に見られたくない。皆に馬鹿にされたくない。育ちや学歴が悪いだけで見下されたくない。だから作り上げた』と。

友人というものは全てをさらけ出せる間柄ではないのですか？少なくとも、彼と私はそういう間柄です。

悩んでいれば相談に乗ってもらえますし、新しい仲間が加わればその話を。

嘘はほぼ言わないのです。悪魔と呼ばれている私たちが。

人はとてもプライドが高く繊細です。年代や国にもよりますが。

なかにはとんでもなく図太くて飽きれてしまうほどの人もいますが。えっ、リージのことだなんて言ってませんよ。

インターネットの世界で作った友人関係、それらに対して嘘をついていたのですね。

嘘なんてどうでもいいですが、最初のオフ会の後何度も会いました。

日記では楽しく楽しく、友達が沢山だと。休みの日は遊びに行って、欲しいものを買う。

その人が、本に書かれていることをそのまま言えば、一人ずっと外に出ないで暮らしていました。

日記は大げさに書いていただけです。



その人は結局どうなったかという、悪いことは特にしていませんが、自殺をした...つまり自分を殺したわけですから、話し合いの結果、地獄へ行っていただきました。

ただし罰なんてほとんどなく、すぐ輪廻しますけれどね。

虚構の世界。虚構の世界は夢でもなくリアルでもなく、そこに新たな自分を作る。

人によっては素のままを、人によっては作り上げた理想の自分を。

プライドを気にして、会う時も何もかも。

一人でさみしいことなんて書けもせず。

その裁判の後、彼に聞きました。

日記とは何ですか。私が知っている日記は、自分の本心を語るノートの様なもの。

それを偽って書くことに何の意味があるのですか、と。

彼は真顔で私が問うのがおかしかったのか、質問内容がおかしかったのか。

ひたすら笑っていましたが、ひとしきり笑った後、『だからこの時代が面白いんだよ』と、流されてしまいました。

性格も若干悪いところは知っていますが、その笑い方に口調、全て見透かしたような目に、さすがに引いてしまいました。

その後煮えたぎる血の海を崖の上から眺めて、ポツリ、と話してくれました。

私たちが接していた彼らは、ほぼ全員が心の内を隠していました。

こちら辺はまだその人たち全員がやってきてないので、彼の憶測ですが...、ただ、彼は人の心を覗き見るのが大好きなので、分かるみたいです。

日記なんてものは、ただの報告書の様なもの。

一人誰にも相談できずに悩み、やがて緩やかな死を求めて動き出す。

心が病んでいるならそれを書けばいいのにと私が言えば、また言われました。

『そんなことすりゃ、あいつと関わりたくないっていうんだ』そう毒づく彼は、少し寂しそうでした。

ではどこでストレスを発散するのか？

会社で疲れ、家では寝て、ネットでの交流は見栄を張る。

なにをそこまでするのだろう。

だから、病院というものが存在すると。

私の知る病院は、人を治すためのもの。色々な成分の物を人にうまく作用するようにして、それを相手につけたり飲ませて、治療するための場所。

ですが、それは今の世の中では、場所によってはただ金をむしり取るだけで、依存性のある強い薬を提供す場所もあるようです。

それどころか、ある国では死を促すための薬もあるそうです。安楽死とはまた違ったものだといわれました。

その病院もやがて信頼できなくなって、アレに行くわけです。

匿名での大型掲示板。私が飽きたといって怒られたアレです。

そこで名も知らぬ人相手に愚痴を吐き、呟き、賛同を貰い、たまに反対をされてそして絶望する。

世界の仕組みが随分と変わっているのですね。

これはこれで面白い世界ですが、私はあまり好みません。

見た目で人を判断しないといけない、インターネットは分からない。

全員が全員というわけではないですが。

当然その地獄行きの人も、私が人間ではないことは当然ですが、設定した『本名』も知らず、日本語のできる、日本が好きな外人としかしらなかった分らなかった。

ハンドルネームと、彼とのやり取り、その程度で判断していたそうです。

孤独に埋もれてその人が生きてきたなんて、会っただけではあまり分かりませんでした。

そのうえで友人という言葉を手軽に使うものかと思うと、ため息が出てしまいます。

作り上げられた世界で、私に本当の友達は何人いたのでしょうか。

その人が自殺に踏み切るまで、相当悩み事があったはず、それをほとんど見せずに過ごしてきたのです。

また、私が虚構世界で暮らす彼らのことをなにを分かったのでしょうか。

私が悩めば悩むほど、隣で血の海を見下ろしていた彼は面白そうに笑いました。

彼らは仮面をかぶって生活している。

変な世界です。

彼にとっては楽しいのですが、私の様な真面目と呼ばれる人間には、疲れる世界でした。

ただそれだけです。

おっと、失礼します、そろそろ次の裁判の時間です。

裁判が終わったら、次はどこに行きましょう！

あの服は持っているので、また行きたいです。日本も面白いですが、次はインドやアメリカにも行ってみたいです。

最近は何事か騒々しいですが、フランスもいいですね。設定づけされたロシアにも行ってみたいです。

寒いところはあまり好きではないので、暖かい場所がいいのですが。

たった数年で世界がらりと変わるらしいので、ちよくちよく行くことにしようと思っています。

その時は勿論、彼に教えてもらいながら。

...すみません、正直、私は少しだけ、複雑なあの世界が気に入りました。

私も悪魔と呼ばれる一種ですから。



「...溶けません」

手元にはしゃれたグラス、なかには下の方に固まった赤いもの、上には氷のはいったミルク。それをがらがらとかき交せている。

「そりゃそうだ、それは混ざらん」

目の前にいる彼は、ビールのはいったグラスをゆすり、のみほした。

「でも前に頼んだ白いものは溶けました。とても冷たかったです」

「お前は素なのかアホなのかわからん。そりゃシェイクだろ」

「手元のはいちごミルクのはずですが」

まだガラガラとかき交せているが、一向に混ざる気配なく、氷だけが溶けて水かさを増す。

下の方にはまだまだ固まったイチゴなるものがあった。

「飲んでも美味しくくないんですよ」

今度は何を頼もうか、と彼がこじられたバーの、飲み物系をめぐっている。

カシスオレンジに、白ワイン、赤ワイン...焼酎もたまにはのみたい。なんて呟きながら。

「それは下の方がゼリーになってるから、何度かき交せても全部は溶けない」

ミルクその最中にも薄まり、イチゴは固まったまま。ゼリーだけを飲めば甘すぎるし、ミルクだと薄すぎる。

いらだたしげに、珍しく肘をついて、舌打ちした。

「何か思ってるな」

「そう見えますか？」

軽く上を見て、彼を見てみれば、メニューを持ったまま、こちらを覗いていた。

「見える」

そのうち彼は相手の薄着の黒いシャツを指差した。

「そのシャツいつもかっちり着てるのに、今日に限ってボタン掛け違えてるわ、ボタン一個外してるわで、行動に出すぎ」

「暑いんです」

ひやりと痛いところをつかれて、そっけなく笑う。

そんな所も見たことがないぞ、と目の前にいる彼は疑い始めた。

「いつもあの熱気の多い血の海のそばで座ってるお前がなに言ってんだ」

いつも黒いロングコートとロングブーツ、拳句に手袋までして平気な顔でいるくせに。

そんなことを言われて、やれやれとため息をついて白状した。

本当に彼は心を読むのが上手い。

「ほら、この前来たじゃないですか。あの人」

「ん？ああ、もしかしてネットの？」

それに何度か頷いた。

「楽しかったんですけどね。あの前後は。私もこう、ここに来るたびに何の服を買おうとかあな

たに相談して、皆に相談して…」

「そうだな」

最近ようやくこの時代に来てから、この男は服を選ぶのも楽しそうだ。  
暇さえあれば来ている気もする。

「それに貴方の部屋で過ごせるので、前のように窮屈な思いはしませんし」

「う」

「前回ホテルすら手配してくれず、一カ月ネットカフェやらで過ごさせられた恨みはいつかはら  
しますよ」

何度も来ているうちに、目の前の彼の家で過ごすことが多くなった。  
流石に半分空家と化している彼の住まいは、誰を泊めてもいいことになっている。  
目の前の男は鉄壁なまでに滅茶苦茶に散らばる彼の部屋が嫌いで、せっせと片付けてはそれを彼  
に崩されている。

何度も片付けるのが癖になっているので、彼の方もこりゃ楽だと彼を泊めることを承知した  
。

「で、あれが？」

集まりの中で一人死を選んで、裁判所に来てしまった。  
その人間が虚構世界の中と現実の狭間で悩み苦しみ、導きだした結果が自殺という手段。  
自分で作り上げた虚構世界での素晴らしいプロフィールと、現実の厳しいプロフィールとの違い  
、コミュニティが苦手なのにオフ会に出たこと。

「おかしいじゃないですか」

こんこん、とゼリーの部分をつついて、ガラスの音を響かせた。

「なんで」

「死んでから皆。可哀想に、とか、分かってやれなかった、とかお決まりの文句。ああいうの嫌  
いなんですよ」

「何か適当な言葉見つけたのがたまたまそれだったんだろ」

バーの上部につけられた小さなテレビを指差す。

「アレで見るまで、あの人がいなくなったことに誰も疑問いだかなかったじゃないですか」  
流石にテレビで自殺が小さく報道されて、それが広まって死んだことに気付いた。

ああそう、あの時は。思い出そうとすると、中々滑稽で、彼は笑いだす。

「笑ってることじゃないですよ」

「だからああいうのが面白いんだって、おれたちが面白がるのはそこだろ？」

悪魔とか言われている我々に。

「綺麗事が嫌いなだけです。分かりやすい綺麗事が。分からないなら素直で分からないでいい  
、分かったのに分かってやれなかった、親愛なる友とか言う言葉、とても嫌いです」

「おまえらしい」

結局その人が死んだ周りはまるで目の前のいちごミルクのよう。

段々疑惑の目で染まっていく、誰がおかしい、皆がおかしい、気付き初めて分離をはじめ、一部

は一部で固まる。

その一方でそうやって離れて言った分を補給するように、どんどん人間を集めて、新たな徒党を組みあげていった。

そのなかに自分たちも入れられているからこそ、苛立っている。

リーダーの人間は、今日も平気な顔をして楽しく酒を飲んでいる。それを途中から抜けて、二人でバーで口直しをして今に至る。

「綺麗事なんですよ。あの人は本当にリーダー？少なくとも我々のリーダーよりらしくないんですけど」

裁判所の、天秤の上にいる鎌を持った男のことだろう。

他にもリーダーと呼ばれる男はいるし、その一部に、今苛立たしげにいちごミルクをかき交ぜ続けている男も入っている。

「人間なんてそんなもんだろ」

「私がここに来て三ヶ月経ちますが、壊れて再構築するのが早すぎます。リーダー？何をさしてリーダーというのでしょうか。いなくなった分を埋めるだけがそれですか？」

そのあとで水っぽい、と呟いて、いちごミルクをストローで飲む。

氷で薄まったミルクは美味くない。だからはやくのめと言ったのに。

「まあまあ、軽くなんか呑んどけ。ビールお前の分頼もうか」

「私はお酒苦手なんです。ジュースがいいです」

「まあ、そうだなー。お前はきっちりしすぎて。もう少し気を抜いてみた方がいいぞ。いちいち人間と重ねてちゃ面倒くさい」

今度はオレンジジュースを頼んで、もう一つは、またビール。

ビールはジョッキで運ばれてきた。

「私は、正直に気持ちが悪いです。一部はともかく、なにもそれに気づかずにどんどん数だけ増やしていくだけのリーダーというものに。数字がすべてなんでしょうか？」

黙って彼は聞いている。外を見れば、雨がちらほらとふってきている。暗い空と、ビルの灯り、その下には様々な色の傘を差した人々がいる。

それをぼーっと眺めている。

「あの連中のなかで一番貧しいのは何だと思う？」

「私たちのいる？貧しい？お金がなくてこれない方もいますね。えーと...あまりかかわってないので名前が」

「ほれお前、見間違いな答えを出した。もう少し裁判所でのあのしっかりした姿、ここでも見せてみるよ。お前の呼んでるリーダーなんてかすむくらいだぞ。なん立って本物のリーダー素質持った奴がここにいるんだからな」

間違えてんぞ、と、軽く頭を叩かれた。

何故叩かれる、と、乱れた髪を直して、すねる姿は、中々に地獄でリーダーを、裁判所で本を託されているものだとは思えない。

「そうじゃなくてここで言う貧しいのは、心だ」

言われて、なるほど、と、記憶を探る。

本を頼りに普段暮らしているだけに、周りをまとめたりするのは得意だが、誰が何を思っているかは、彼よりは断然に分かりづらい。なんたって目の前の彼は、心を直接読むことができるんだから。

たまに人が見ていない前で、笑ってるのは、心を読んで楽しんでいるのだろう。

「しんだあの人でしょうか？死んだからどうしようもないですけど。あ、いや、結構いますね。私に分かる限りだと...」

「お前の言うリーダーだよ、一番は」

「はあ。そうですか？つけている衣服も、ついて回る人たちを見てもあまりそうは見えない」

「虚構世界ではね」

インターネットとその間のことをさしているのだろう。

それでもよく分からず、首をかしげる。

「お前の作った言葉が面白いから使わせてもらった。ああ、そうか、お前はもっと前のあいつらのところ知らないんだっけ？」

ビールを一気に飲んで、半分残す。

そのあと髪を乱して、煙草に火をつけようとしたので、それを止めた。

「煙草は狭いところで止めてください」

「はいはい」

「それで？」

全く溶けないゼリーを無視して、オレンジジュースに口をつける。氷が入っているが、まだ解けていないから、濃くて美味しい。

「普通のあいつ見たことない？」

「ないですね。覗きの趣味ありませんので」

「まあ、一度見てみりゃ面白いもん見られる」

意地悪く笑う彼を見て、なんとなく嫌な感情がこみあげる。

典型的な悪魔な性格をしてている彼にではなく、そのリーダーの知らない部分に。

「見たんですか」

「正確には見えちゃった」

相手は語りだした。

煙草はやめろと言ったというのに、煙草に火を付けた。

煙草の匂いが少しだけ、心地いい。

「や、ね。こいつは本当に見えちゃったって言うだけだ。あいつ楽しそうだろ？身だしなみ正しくて、気遣いの出来そうな」

「ん」

時々悪ふざけをして、皆を先導して。

よく笑って、輝く人。

光り輝くリーダーの闇を知っているか、と、言う目でこちらを見る。  
光あれば、光の裏では濃く影を落とす。  
強く強く光当たる場所の壁を裏側行けば、その通り。なにも見ないほどの影を。

「その通りだよ」

また考えを見透かされた。

まだ幼いうち、彼に連れられて光のあたる場所へ行き、眩しさのあまりその壁の裏に行き、闇に安堵した記憶がある。

その時の壁の裏は苔蒸して、カビ臭く、光を嫌う様々な虫たちがいた。

「人の心もそれだよ」

「いちいち心を覗くのはやめてほしい」

人間以外の心も見透かすため、彼は奇異な目で見られる。

普段は見ているだけで何も言わないが、親しい二人だけになった時、よく見透かされてそれをつかれては、嫌な気持ちにさせられている。

(それくらいで嫌になっていたら、こうしていないものだけど)

「嬉しいじゃん、お前の考えていることは素直で分かりやすい」

「だから覗くなと」

まあまあ、と軽く笑いながら手を振るが、本題に入った。

「あんまりにも自己顕示欲が強すぎて、結構あいつらの心ってガンガン見せつけられるんだ。覗くんじゃなくて、いちいち見せつけられる感じ。んー、説明が難しいな」

煙草を吸い、空中にはきだす。

少し煙を吸って、むせてしまった。

彼はそれを見ながらも気に留めず、続ける。

「たとえば、目の前に紙があって、本でもいいけど。お前はそれを見ていくんだよ。裁判でも、いちいち本を読むだろ。そうじゃなくて、目の前に突きつけられて、顔をそらしてもそらしても色んな奴らの心の中が目をふさごうとしても見える」

「？」

本を見ながらというのは分かるが、目をそらしても見えてしまう、ということは、無理やり見せつけられているものだろうか。

覗き見が大好きな彼にとっては、いいことではなさそうだ。

「そうなんだよ、隠してる奴のを見るのは好きなんだけど、こう、『私を見ろ!!』とかそういうのが強すぎて、次から次へと表のツラとは逆の心理を見せつけられる。最初は嫌だったんだけど、あんまりにもギャップの激しいやり取りを見せつけられてな。そのうち面白くなってきて、次は何を考えてるのか、話を聞いてるだけでも流れてくる。特にリーダー格の奴はそれが強い。輝く自分を見てほしい半面、隠して滅してたいのは現実、何もない時の自分自身で言う」

「つまり、皆の前では無理をして、日常ではさえない人間ということか」

「そうそう、それ。しかも段々過去の取り巻きが離れていくんで、そいつらのことを見るわけよ。俺は。何考えていると思う？」



分からなくなって、首をゆるくふる。押しつけられそうなほど煙草の先を向けられて、思わず身をひいた。

分からないといえども、過去の裁判の事例を挙げれば、どの時代もあるのが、自分は特別だと思いたい、しかしその逆を見せつけられて落ち込む人間たち。

なかにはとんでもなくおのれを貫く者もいるが、大抵は、自分自身を持っておらず、迷子になっている状態の人間だ。

裁判中に、悪いことを言われれば青ざめ、よいことを言われれば喜ぶ。  
一喜一憂し、下された判決に従う。

「それに似てるな。光ある所についていこうとするのが人間なんだよ。崩壊していくのが分かっているのに、それから眼をそらしてついていこうとする奴もいるんだが、気付いて離れていく奴もいる。離れた奴はまた新しい光についていく。光は見放されて、新しい信者を探そうとする。そのうち光は何をすればいいかわからなくなって、初心を忘れてひたすら数を増やす。数というのは目にすぐつきやすい。沢山の取り巻きに囲まれている奴を見れば、ついていきたいと思うんだよ。だが裏を返せばそいつは特別でも何でも無い。ただの自己顕示欲と目立ちたがり屋の塊」  
数というのは、恐らく友達の数や知り合いの数。

それはSNSで、目立つように表記されて、その人がどれだけ友達が多いかわかる。  
実際の友達は何人だか、というのは以前思った通りだ。

「ふむ」

首をかしげながら頷くと、彼は煙草を灰皿に押しつけて、煙をこちらに吹きかけてきた。

「簡潔に言えと言いたげだな」

「げほっ、煙はやめてください。そこまでは思ってないです。そういうときは心を覗いてきてもいい」

「うん、まあそんなの。数値でしか物を図れなくなっちゃったんだな。質より量、それも質が劣ったとみなせばどんどん捨てて新しいものを質関係なく集めて、それを繰り返すだけのな。だけど人間だから、心のどっかでそれはおかしいと思ってるんだよ。本人も。だけどそう言う大事なこと全部見なかったふりにして、どんどん捨てて、どんどん新しいものを入れて、結果的にお前が言ったようなことになる」

「私の言ったこと？」

色んな話をしたので、あまり思い出せない。こういう所が鈍いといわれるせいか、また彼に叩かれた。

「いちごミルクの例えだよ！馬鹿」

「はい。すみません、貴方にしては可愛らしい単語すぎて、変な気分です」

素直に言うと、軽くまたはたかれた。

見た目も口も品性方向正しくない彼には、いちごミルクとは随分可愛らしすぎると素直に思った。

「うるせえ。固まったゼリー一つのは、捨てられていった、もしくは離れて言った奴らな。ミルクはリーダー。氷は新しい奴ら。氷は混ざって溶けていくが、滅茶苦茶に入れられた氷は溶け

れば、どんどん薄まって味のないものになっていく。固まったゼリーはどんだけ混ぜてもミルクに溶けない」

「水増しされた味のないミルクを誰が飲むか、ということに最終的になりますか」

「簡単に言えばそう言うこと」

「では、それにたとえられたあの人たちは？」

「薄いミルクは捨てられる。新しいミルクを用意して、以下繰り返す」

リーダー自体も見捨てられる、もしくは別のリーダーが用意されるか、現れる。

そして神格化されたリーダーはやがて図に乗り、どんどん人を集め、失敗すれば過去のリーダーと同じように。

「ま、今の状況は二カ月も持たないよ。もう顔出さなくなった奴らは奴らで、新しいグループ作っちゃまって、そっちで楽しくやってんだ」

「はい」

「当時は誰一人として言えなかった、本音をぶちまけてな」

「本音を言えないのはなぜでしょうね」

「お前は本音ばかり言うからな。もうちょい本を読む立場なんだから、人間の隠してる本音って奴を学べ。というかそれが目的で住まわせてやってるんだろうが」

忘れていたが、ここに来た理由はゴラン半分で、そのもう半分というのは、人間の心理をもっと学ぶためだった。

どんどん時代が変わっていく世界のことも踏まえたうえで、隠し方も巧妙になっていき、分からない単語が増えてきて困ってきた所に、彼に誘われて、見に来たはずだった。

「気が付いたら、食べ物と飲み物が美味しいとか、服が色々あって着てみたいとかその目的になっていました」

「本当にびっくりするくらい素直だな」

「はい、すみません。それで当時は誰も言えなかったとは？」

彼は、質問すると、がっくりと頭を垂れて、ビールをあおった。

音を響かせてジョッキを置く。

少々座った目で、睨みつけられてしまった。

とはいえ、彼がこの程度の酒で酔うはずもないのは誰より知っている。

「こんな集まりおかしい、こんな奴らおかしいって言ったら、その輪から外されるからに決まってるんだろが！」

「そうなんですか」

オレンジジュースが酸味がきいて美味しいですね、と言ったら、頬をつねられる。

「痛いです。でもその輪から外れたんでしょう、結局」

「そうだよ。自主的に離れた奴もいりゃ、思い切って周りに言ったら、同意が返ってきて、そいつらだけで集まって別の会合が開かれる。そうすると完全に集団心理として結束の強い奴らは、昔のリーダーと関わりを絶つ」

「いいことじゃないですか」

たぶん、と小さく付け加えると、またつねられた。

今度は強くつねられて、思わず頬に手を当てた。

ちょっと涙がにじむくらいにつねられた。

「まあ、こういうことだ。こういうのが起きるのが、お前の興味の持つ世界の正体、もとい、醜態か」

「ちょっとうまいこと言ったかと思ってませんか？あまり上手くないです」

「お前覚えてろよ、家に泊らせてやらん」

「すみません」

深々とわびると、彼は笑って、頭を押さえつけてくる。

せっかく綺麗に整えた髪をぐしゃぐしゃにされてしまい、男は困る。

しかしそれをそのまま受け入れて、何度も髪を乱された後、やっと手を放され、また整え出す。周りから見れば、妙に大人しい男と大人しくない男が変なやり取りをしているようにしか見えない。

「お前は素直だから可愛い奴だと思う」

「嬉しくないですがありがとうございます。私は貴方の前で嘘は言うの得意ではないので」

「素直すぎるからそのサポートばっかさされてるんだ、俺は苦労もんだよ」

「ここではただの貴方の友人ですが、裁判所でも、貴方はかけがえのない親友なんです。世間知らずな私をよく、色んなところに連れ回してくれましたね」

男は微笑んで、ジュースを飲む。

丁寧にストローを抑えて飲み下す。

それを見ながら、彼は黙りこんだ。

昔の話をしようか、困り果てているようだ。

「トロい、素直すぎる、優しすぎるの三重苦でどうしようもない奴だもんな。そいつがまあ、裁判所で容赦なく悪行を述べあげる裁判人となったもんだよ」

「私もそう思います。貴方みたいな方がいるおかげで、苦労は絶えませんが、時々困りますね」一度ジュースを飲んだ後、男は外を見た。雨はやんでいて、酔っ払った男女が何組か楽しそうに外を歩いていた。

「何で困るんだよ」

「貴方の様な大事な人がいるから迷いが無いんです。疑うことを知らないのです、皆の言う人間の黒い部分が理解できないでいます」

笑顔で言った後、思いっきり彼に拳で頭を殴られ、その頭を抱えて苦しむ。

照れ隠しでもあるのだろうか、彼はその頭を軽く撫でると、一言言った。

「お前、悪魔失格」

「はい、すみません。性格が天使のようで」

そして何度目かの鉄拳の音が響いた。

終



下書き。

虚構世界(ミライハキレイニ)

1.虚構世界

黒い本の人、名前はまだない。の独白だが、ものすげえ毒づいた内容に、友人何人かは心配してくれました。

語り手が黒い本の人。

悪魔と称されているとジャッジメントで書いたんですが、いちいち書くの面倒なので、もう悪魔ってことにしておこう。

結構ナルシストに。

## 2.虚構世界2

今度は一人称ではないですが、基本的に二人とも名前がないので、彼=隣の人、男=本の人です。これ考えたのは、カラオケboxで歌いまくっていた時、頼んだいちごミルクがえっらい分離していて、何度描き交ぜても固まらないのが何かに似ていて描いてみた。

本当に固まらない、ゼリーになっていて、ほっといたら薄くなるし、直接飲んだら甘すぎる!! ブチ切れた小説です。ええ、ブチ切れてます。

虚構世界1で人が死亡したあとのネット世界の住人の反応の薄さに起る黒い本の人。

名前について、結構考えていましたが(確かネット上でロシア人設定)、名前はないっないっ!! ブチ切れていたの、ハングアウトでひやといさんに、「黙れ」を連呼して、茶屋さんが爆笑していた。

ごめんねひやといさん(´・ω・`)でも黙れ

## 虚構世界

初期だと「ミライハキレイニ」とか言う題名でしたが、ただ単にその時間聞いていた平沢の曲に「ミライハキレイニ」と電子的な声が入っただけです。

虚構世界は他の小説で作り上げた適当な単語です。

インターネットは便利ゆえに友人を得やすいですが、逆に変な人もいるのも事実。

これ系はオフ会やってる人は、覚えてがあるのでは？

あとBLじゃないですよ。BLは書きたいですが、夏コミ用の漫画と、ずっと書きたいけど進んでないオリジナル小説があるんです。

うちのBLは基本的にR-18。

## ミライハキレイニ

<http://p.booklog.jp/book/52796>

著者：香吾悠理(エビル)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yuuri15/profile>

<http://yuuri15.huu.cc/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52796>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52796>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ